

成長過程行動尺度の妥当性の検証

筑波大学大学院人間総合科学研究科 山影有利佐

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 松井 豊

A study of confirming the validity of a Growth Process Behaviors scale

Arisa Yamakage (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Yutaka Matsui (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The validity of a Growth Process Behaviors scale is investigated. Undergraduates ($n = 318$) responded to a questionnaire consisting of items measuring human growth resulting from negative events. Specifically, this paper examines the relationships among utilizing the same personal resources (Ihaya & Nakamura, 2008), the Tri-axial Coping Scale (Kamimura, Ebihara, Sato, Togasaki & Sakano, 1995), and growth process behaviors. The results are consistent with our predictions and provide evidence for the validity of a Growth Process Behaviors scale. The growth process behaviors indicated by the relationships among the three scales are discussed.

Key words: human growth, resilience, coping response, negative events

目 的

本研究では、ネガティブな出来事を契機として人間的成長を経験した者を対象に、成長過程行動尺度と個人内資源の活用尺度や対処方略尺度との関係を検討することによって、成長過程行動尺度の妥当性を確認し、同下位尺度の意味づけを明らかにすることを目的とする。

成長に関する従来の研究では、ネガティブな出来事を契機に成長が獲得されると捉えられてきた (Cordova, Cunningham, Carlson & Andrykowski, 2001, Taku, Calhoun, Tedeschi, Gil-Rivas, Kilmer & Cann, 2007)。しかし、成長の契機には、ネガティブな出来事だけでなく、ポジティブな出来事も存在すると考えられる。例えば、戸梶 (2004) は、感動体験といったポジティブな出来事を契機として他者志向や対人受容などの変化が見られることを明らかにしている。

そこで、山影 (2009, 2010) は、ネガティブな出

来事だけでなく、ポジティブな出来事を成長の契機として扱ったときの人間的成長について検討している。具体的には、ポジティブな出来事として対人関係の好転や課題の高評価、ネガティブな出来事として対人関係の悪化や課題の不出来、中性的な出来事として環境の変化を挙げ、これら5種の出来事を契機としたときの人間的成長に至る過程を検討している。山影 (2010) は、成長に至る過程として、成長の契機で体験した感情 (以下、成長契機感情) の3側面と、成長に至る過程で行った行動 (以下、成長過程行動) の5側面を、山影 (2009) は、それらに加え、成長過程を経た結果として、人間的に成長した側面 (以下、人間的成長) の2側面をそれぞれ導出している。そして、これらの導出を基に、成長契機感情尺度、成長過程行動尺度、人間的成長尺度を作成している。これらの尺度は、ポジティブな出来事とネガティブな出来事を契機とした成長に至るまでの過程を、契機となった出来事の種類の別と比較することを可能にする。

成長契機感情尺度と人間的成長尺度の2尺度については、これまでに妥当性が確認されている(山影, 2009)。成長過程行動尺度については、ソーシャル・サポートが成長を促進するという知見(Park, Cohen & Murch, 1996)を受け、ソーシャル・サポート尺度との関係を検討することで同尺度の妥当性を確認している。しかし、ソーシャル・サポート尺度では、道具的・情緒的支援を与えてくれる家族や友人の程度が測定されているのに対し、成長過程行動尺度では、成長する過程で回答者自身が行った行動が測定されている。したがって、成長過程行動尺度の妥当性の検証には、サポートを与えてくれる他者の程度を測定する尺度だけでなく、成長の過程で自らが行った行動を測定する尺度との関連を検討することも必要であると考えられる。

従来の研究では、学業ストレスを体験したときの原因について考えるなどの問題解決的な対処や(神藤, 1998)、自己志向性の高さが(石毛・無藤, 2005)、成長を促進することが明らかにされている。そのうち、自己志向性は、レジリエンスの1側面とされており、レジリエンスは、ネガティブな心理的状态から回復できる個人の心理面の弾力性を表す。したがって、ネガティブな出来事を経験したときの対処の仕方やレジリエンスの高さが、成長過程行動と関連があると予測される。

そこで、本研究では、ネガティブな出来事を契機に成長を経験した者を対象に、レジリエンスの1側面であり、回答者自身がストレスからの回復を目的に行った行動を測定する個人内資源の活用尺度(井俣・中村, 2008)と、日常の全般的なストレスへの対処行動を測定する対処方略尺度(神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995)を使用し、成長過程行動尺度の妥当性を確認することを第一の目的とする。

個人内資源の活用尺度には4つの下位尺度(「楽観的行動」「熟慮的行動」「気晴らし行動」「状況分析行動」)がある。これらの下位尺度のうち、「楽観的行動」は深く問題等にこだわらず前向きに考える行動、「熟慮的行動」は再度同じ過ちを起ささないよう工夫するといった内容の行動、「気晴らし行動」は何か他の行動をして気分を紛らわす行動、「状況分析行動」は今置かれる状況などを多角的に捉えようとする行動とそれぞれ定義されている(井俣・中村, 2008)。

次に、対処方略尺度には8つの下位尺度(「計画立案」「肯定的解釈」「放棄諦め」「回避的思考」「情報収集」「カタルシス」「責任転嫁」「気晴らし」)がある。これらの下位尺度のうち、「計画立案」は自

身による問題の解決のための努力、「肯定的解釈」は状況のよい面を見ていこうとする認知機能、「放棄諦め」は問題の解決を避けるための認知的判断、「回避的思考」は望ましくない面の認知的情報処理の停止、「情報収集」は問題解決のための方略を他者に求める行為、「カタルシス」は共感的に体験を語る行為、「責任転嫁」は問題から逃げてしまう行為、「気晴らし」は情動の調整のために忘れられるようなことに従事する行為であるとそれぞれ定義されている(神村他, 1995)。これらの定義を踏まえて、成長過程行動尺度と個人内資源の活用尺度や対処方略尺度との関連を予測する。

成長過程行動尺度の下位尺度については、「自己開示」という自分が気がかりとなっている事柄を人に打ち明ける側面、「日常会話」という日常のたわいもない出来事を人に話す側面、「同一化」という身近な人を見習う側面、「自己向上」というよりよい自分を目指して行動する側面、「新しい経験」という新たな経験をする側面の5側面が抽出されている。なお、「新しい経験」は、成長過程行動ではなく、成長の契機である可能性があるため、本研究では「新しい経験」以外の4側面を扱う。(本研究で扱う各下位尺度を測定する項目はTable 1を参照)。

まず、成長過程行動下位尺度の「自己開示」は、気がかりとなっている事柄を人に打ち明ける行動である。他者への開示は、自分とは異なる他者からの解決の方法や共感的な理解を得る機会をつくり、自分が置かれる状況についての多角的な見方を促すと考えられる。よって、「自己開示」は、個人内資源の活用下位尺度の「状況分析行動」、対処方略下位尺度の「情報収集」「カタルシス」と正の関連があら

Table 1 本研究で扱う成長過程行動下位尺度の項目例

	代表項目
自己開示	なかなか言いづらい自分のことを人に打ち明けた 自分の胸のうちの明かすような真剣な話をした
日常会話	たわいもない話をした 息抜きとして日常のささいな出来事を人と語り合った
同一化	人の行動や考え方を見習った 人のよいところを真似しようとした
自己向上	自分の立てた目標を成し遂げるために、努力したり やり遂げることが困難なことにも積極的に取り組んだ

ると予測される。

次に、「日常会話」は、日常のたわいもない出来事を人に話す行動である。日常のたわいもない会話は、問題とは異なることを考え、気分をまぎらわせたり、前向きな考えをもたらず働きをすると考えられる。よって、「日常会話」は、個人内資源の活用下位尺度の「楽観的行動」「気晴らし行動」、対処方略下位尺度の「肯定的解釈」「放棄諦め」「回避的思考」「責任転嫁」「気晴らし」と正の関連があると予測される。

「同一化」は、身近な人を見習う行動である。身近な人を見習う行動は、問題解決のための方略を他者に求め、再度同じ過ちを起こさないように工夫する行為であると考えられる。よって、「同一化」は、個人内資源の活用下位尺度の「熟慮的行動」、対処方略下位尺度の「情報収集」と正の関連があると予測される。

「自己向上」は、よりよい自分を目指して努力する行動である。このような行動は、状況のよい面に目を向けながらも、同じ過ちは起こさないように努力する行動であると考えられる。よって、「自己向上」は、個人内資源の活用下位尺度の「熟慮的行動」、対処方略下位尺度の「計画立案」「肯定的解釈」と正の関連があると予測される。

また、個人内資源の活用尺度や対処方略尺度との関連を分析すれば、成長過程行動尺度のそれぞれの下位尺度がもつ意味を捉えることができると期待される。そこで、本研究では、それらの関係を検討し、成長過程行動尺度の下位尺度ごとの結果について考察することで、成長過程行動下位尺度の意味づけを行うことを第二の目的とする。

方 法

調査対象者

岡山県内と都内の私立大学、茨城県内の国立大学と私立大学の大学生860名(男性304名,女性550名,不明6名;平均年齢:20.02歳, $SD = 2.33$)を対象とした。成長した経験や成長の契機がない者、26

歳以上の者を除外した811名のうち、成長の契機としてネガティブな出来事を選択した者318名(男性102名,女性216名;平均年齢:19.83歳, $SD = 1.17$)を分析の対象とした。

調査方法

集合配布による、無記名の質問紙調査を実施した。調査時期は、2010年6月であった。

調査内容

①成長過程行動 山影(2009)の成長過程行動尺度のうち、「新しい経験」を除く、「自己開示」「日常会話」「同一化」「自己向上」の4側面を構成する計32項目を使用した。教示文は、「あなたがよい方向へ変わっていく、精神的に成長していく過程で、“今考えてみると、このことがあなたの支えとなって”成長できたと思うものがありますか。」とした。回答は「1あてはまらない」から「5あてはまる」の5件法により評定を求めた。

②個人内資源の活用尺度 井準・中村(2008)の全38項目を使用した。回答は「1あてはまらない」から「5あてはまる」の5件法により評定を求めた。

③対処方略尺度 神村他(1995)の全24項目を使用した。回答は「1あてはまらない」から「5あてはまる」の5件法により評定を求めた。

結 果

各尺度の基礎統計量及び信頼性の検討 成長過程行動尺度の平均値と標準偏差をTable 2に示す。成長過程行動尺度の内的整合性を検討するために、各下位尺度のクロンバックの α 係数を算出した(Table 2)。その結果、各下位尺度の α 係数は.85～.92の値を示していたことから、成長過程行動尺度の十分な信頼性が確認された。

個人内資源の活用尺度の平均値と標準偏差をTable 3に示す。個人内資源の活用尺度の内的整合性を検討するために、各下位尺度のクロンバックの α 係数を算出した(Table 3)。その結果、各下位尺度の α 係数は.79～.88の値を示していたことから、個人内資源の活用尺度の十分な信頼性が確認され

Table 2 成長過程行動尺度の平均値・標準偏差と α 係数

下位尺度	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
自己開示	3.25	1.07	.92
日常会話	3.65	0.92	.90
同一化	3.64	0.82	.86
自己向上	3.41	0.81	.85

Table 3 個人内資源の活用尺度の平均値・標準偏差と α 係数

下位尺度	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
楽観的行動	2.62	0.89	.81
熟慮的行動	3.46	0.71	.79
気晴らし行動	3.32	0.98	.88
状況分析行動	2.64	1.03	.82

た。

対処方略尺度の平均値と標準偏差を Table 4 に示す。対処方略尺度の内的整合性を検討するために、各下位尺度のクロンバックの α 係数を算出した (Table 4)。その結果、各下位尺度の α 係数は .77 ~ .91 の値を示していたことから、対処方略尺度の十分な信頼性が確認された。

成長過程行動尺度と個人内資源の活用尺度との関連 成長過程行動尺度の妥当性の検証のために、成長過程行動尺度と個人内資源の活用尺度との相関係数・偏相関係数を算出した (Table 5)。偏相関係数は、他の成長過程行動の下位尺度を統制した成長過程行動の各下位尺度と個人内資源の活用の各下位尺度との偏相関係数を示す。

偏相関分析の結果、「自己開示」は、「状況分析行動」と有意な正の偏相関、「楽観的行動」「気晴らし行動」と有意な負の偏相関を示した。「日常会話」は、

Table 4 対処方略尺度の平均値・標準偏差と α 係数

下位尺度	M	SD	α
情報収集	3.14	1.11	.77
放棄諦め	2.65	1.07	.80
肯定的解釈	3.06	1.06	.84
計画立案	3.50	0.95	.78
回避的思考	2.95	1.08	.82
気晴らし	3.09	1.16	.78
カタルシス	3.57	1.20	.91
責任転嫁	2.25	1.06	.83

「楽観的行動」「気晴らし行動」と有意な正の偏相関を示した。「同一化」は、「熟慮的行動」と有意な正の偏相関を示した。「自己向上」は、「熟慮的行動」「状況分析行動」と有意な正の偏相関を示した。

成長過程行動尺度と対処方略尺度との関連 成長過程行動尺度の妥当性を検証するために、成長過程行動尺度と対処方略尺度との相関係数・偏相関係数を算出した (Table 6)。偏相関係数は、他の成長過

Table 5 成長過程行動尺度と個人内資源の活用尺度の相関・偏相関係数 (N = 181)

成長過程行動 下位尺度	個人内資源の活用 下位尺度			
	相関係数			
	楽観的 行動	熟慮的 行動	気晴ら し行動	状況分 析行動
自己開示	.02	.40 **	.29 **	.41 **
日常会話	.25 **	.40 **	.55 **	.41 **
同一化	.19 *	.51 **	.43 **	.40 **
自己向上	.04	.53 **	.32 **	.42 **
成長過程行動 下位尺度	偏相関係数			
	楽観的 行動	熟慮的 行動	気晴ら し行動	状況分 析行動
自己開示	-.17 *	.12	-.15 *	.19 *
日常会話	.17 *	.06	.39 **	.12
同一化	.00	.18 *	.14 †	.06
自己向上	.03	.32 **	.07	.24 **

注) 他の成長過程行動を統制したときの偏相関係数を示す。

注) † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

Table 6 成長過程行動尺度と対処方略尺度の相関・偏相関係数 (N = 185)

成長過程行動 下位尺度	対処方略 下位尺度							
	相関係数							
	計画立案	肯定的解釈	放棄諦め	回避的思考	情報収集	カタルシス	責任転嫁	気晴らし
自己開示	.39 **	.33 **	-.19 *	-.10	.52 **	.61 **	.20 *	.27 **
日常会話	.21 *	.45 **	.17 *	.19 *	.43 **	.48 **	.30 **	.50 **
同一化	.36 **	.37 **	-.03	.05	.59 **	.42 **	.17 *	.41 **
自己向上	.40 **	.41 **	-.07	-.03	.51 **	.38 **	.26 **	.34 **
成長過程行動 下位尺度	偏相関係数							
	計画立案	肯定的解釈	放棄諦め	回避的思考	情報収集	カタルシス	責任転嫁	気晴らし
自己開示	.23 **	.01	-.18 *	-.13 †	.23 **	.44 **	.02	.00
日常会話	-.15 *	.22 **	.26 **	.23 **	-.01	.16 *	.20 **	.36 **
同一化	.08	.00	-.06	-.01	.30 **	.06	-.07	.09
自己向上	.25 **	.26 **	-.08	-.02	.18 *	.06	.12	.06

注) 他の成長過程行動を統制したときの偏相関係数を示す。

注) † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

程行動の下位尺度を統制した成長過程行動の各下位尺度と対処方略の各下位尺度との偏相関係数を示す。

偏相関分析の結果、「自己開示」は、「計画立案」「情報収集」「カタルシス」と有意な正の偏相関、「放棄諦め」と有意な負の偏相関を示した。「日常会話」は、「肯定的解釈」「放棄諦め」「回避的思考」「カタルシス」「責任転嫁」「気晴らし」と有意な正の偏相関、「計画立案」と有意な負の偏相関を示した。「同一化」は、「情報収集」と有意な正の偏相関を示した。「自己向上」は、「計画立案」「肯定的解釈」「情報収集」と有意な正の偏相関を示した。

考 察

第一の目的である、成長過程行動尺度の妥当性を検証するために、個人内資源の活用尺度や対処方略尺度との関係についての予測について検討する。「自己開示」については、予測どおり個人内資源の活用下位尺度の「状況分析行動」、対処方略下位尺度の「情報収集」「カタルシス」と正の偏相関を示した。

「日常会話」については、予測どおり個人内資源の活用下位尺度の「楽観的行動」「気晴らし行動」、対処方略下位尺度の「肯定的解釈」「放棄諦め」「回避的思考」「責任転嫁」「気晴らし」と正の偏相関を示した。

「同一化」については、予測どおり個人内資源の活用下位尺度の「熟慮的行動」、対処方略下位尺度の「情報収集」と正の偏相関を示した。

「自己向上」については、予測どおり個人内資源の活用下位尺度の「熟慮的行動」、対処方略下位尺度の「計画立案」「肯定的解釈」と正の偏相関を示した。

以上より、成長過程行動尺度のいずれの下位尺度においても予測どおりの結果が得られたことから、成長過程行動尺度の妥当性が確認された。

一方、予測の範囲外の結果として、「自己開示」は、対処方略下位尺度の「計画立案」と有意な正の偏相関を示し、個人内資源の活用下位尺度の「楽観的行動」「気晴らし行動」、対処方略下位尺度の「放棄諦め」と有意な負の偏相関を示した。

「日常会話」は、対処方略下位尺度の「カタルシス」と有意な正の偏相関を示し、対処方略下位尺度の「計画立案」と有意な負の偏相関を示した。

「自己向上」は、個人内資源の活用下位尺度の「状況分析行動」、対処方略下位尺度の「情報収集」と有意な正の偏相関を示した。これらの予測の範囲外の結果も含めて成長過程行動尺度の意味づけを行

う。

第二の目的である、成長過程行動尺度の意味づけを行うために、成長過程行動尺度の下位尺度ごとの個人内資源の活用尺度や対処方略との関係について考察する。

成長過程行動の「自己開示」は、「情報収集」「計画立案」「状況分析行動」「カタルシス」と関連が見られた。これらの結果から、「自己開示」は、他者に気持ちを打ち明ける中で、他者から意見をもらい、どうすべきかを考え、状況の把握を行うことによって、気持ちを静める行動であると考えられる。

成長過程行動の「日常会話」は、「気晴らし行動」「責任転嫁」「放棄諦め」「回避的思考」「カタルシス」「楽観的行動」「肯定的解釈」と関連が見られた。これらの結果から、「日常会話」は、他者と取り留めのない会話をすることで、問題については深く考えず、責任を人のせいにして気持ちを晴らし、解決を諦め、今後はよいことがあるだろうと楽観的に考える行動であると考えられる。

成長過程行動の「同一化」は、「情報収集」「熟慮的行動」と関連が見られた。これらの結果から、「同一化」は、他者のよい部分や行動を参考にしながら、問題の原因についてよく考える行動であると考えられる。

成長過程行動の「自己向上」は、「情報収集」「計画立案」「熟慮的行動」「状況分析行動」「肯定的解釈」と関連が見られた。これらの結果から、「自己向上」は、よりよい自分を目指して行動する中で、情報を得ながらどのようにすべきかを考え、状況を把握することによって、よい面を見つける行動であると考えられる。

以上の結果をまとめると、「自己開示」は状況を把握する問題解決的な働きと感情が浄化される情緒的な働き、「日常会話」は状況を考えず、楽観的に考えるといった問題回避的な働き、「同一化」は他者を参考に解決策を考えるといった問題解決的な働き、「自己向上」は状況を把握する問題解決的な働きとその状況の中からよい面を見つける情緒的な働きをそれぞれする行動であると考えられる。すなわち、「日常会話」は問題回避的な働きをする行動であるのに対し、「同一化」は問題解決に向けた働き、「自己開示」と「自己向上」は問題解決的な働きに加え、情緒的な働きの両方をする行動であることが明らかとなった。

また、問題解決的な働きと情緒的な働きの両方をする「自己開示」と「自己向上」とでは、それぞれの行動がどのような手段を通じて情緒的な働きをするかに違いが見られた。「自己開示」は、他者への

開示といった行動的手段をとった結果として感情が浄化されるのに対し、「自己向上」は、自らの認知判断を通じて肯定的な解釈が行われることで情緒的な働きをすることが明らかとなった。

本研究では、成長過程行動尺度の妥当性の検証と同尺度の意味づけを行うことを目的とした。その結果、成長過程行動尺度の妥当性が確認され、同尺度の意味づけが考察された。

ただし、本研究では、ネガティブな出来事を契機に成長を経験した者に限定し、成長過程行動尺度の妥当性と同尺度の意味づけを行っている。そのため、今後はポジティブな出来事や環境の変化といった中性的な出来事を契機としたときの成長過程行動尺度の妥当性と同尺度の意味づけを行うことが必要であろう。

引用文献

- Cordova, M.J., Cunningham, L.L.C., Carlson, C.R. & Andrykowski, M.A. (2001). Posttraumatic growth following breast cancer: A controlled comparison study. *Health Psychology, 20*, 176-185.
- 井俣経子・中村知靖 (2008). 資源の認知と活用を考慮した Resilience の 4 側面を測定する 4 つの尺度 パーソナリティ研究, **17**, 39-49.
- 石毛みどり・無藤 隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連—受験期の学業場面に着目して— 教育心理学研究, **53**, 356-367.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1995). 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究, **33**, 41-47.
- Park, C.L., Cohen, L.H. & Murch, R.L. (1996). Assessment and prediction of stress-related growth. *Journal of Personality, 64*, 71-105.
- 神藤貴昭 (1998). 中学生の学業ストレスと対処方略がストレス反応および自己成長感・学習意欲に与える影響 教育心理学研究, **46**, 442-451.
- Taku, K., Calhoun, L.G., Tedeschi, R.G., Gil-Rivas, V., Kilmer, R.P. & Cann, A. (2007). Examining posttraumatic growth among Japanese university students. *Anxiety, Stress & Coping, 20*, 353-367.
- 戸梶亜紀彦 (2004). 『感動』体験の効果について—一人が変化するメカニズム— 広島大学マネジメント研究, **4**, 27-37.
- 山影有利佐 (2009). 成長のきっかけで体験した感情・その後の行動や経験・成長を測定する尺度の妥当性の検証 日本社会心理学会第 50 回大会発表論文集, 778-779.
- 山影有利佐 (2010). 青年期の成長契機場面と感情, 成長過程行動に関する検討—愛着スタイルに着目して— 青年心理学研究, **22**, 17-32.

(受稿 9 月 30 日：受理 10 月 20 日)